

# 速報洋画

頁八号本

令和三年十月八日（金曜日）  
（つちのとうし）  
辛丑  
月出 午前七時二十二分 月入 午後六時三十分  
●本紙定価 非売品  
●広告 五号十八字 六号二十二字  
●一行一回  
●展示室五外持出厳禁  
発行所 愛知県名古屋市 愛知県美術館  
東区東桜一丁目  
電話番号 〇五二九七一 五五一 一 番  
発行編集印刷 愛知県美術館

## 高橋由一 不忍池

東京上野の不忍池を現在の広小路側から遠望している。弁天堂が見える。写生帖に元となったスケッチがあり、明治六（一八七三）年六月二十五日と制作日が記されている。これは履歴によると、ちょうど由一が浜町に住居を新築し、画学場天絵楼を創設した時である。

### 制作時期の推測

現在一八八〇年頃の制作とされているのは一八八〇年の月例展に『不忍池ノ遠望』と『不忍ノ暮景』が出品され、そのどちらかと推定されているから。不忍池が描かれた記録があるのは次のとおり。

『読売新聞』一八七六年十一月四日 不忍池の冬の景

『読売新聞』一八七七年二月三日 不忍池の暮景

『読売新聞』一八七七年八月九日 不忍池の図

『読売新聞』一八八〇年六月五日 不忍池の遠望

『読売新聞』一八八〇年八月一日 池の端暮景（不忍ノ暮景）

これを見ると一八八〇年より前に描かれた可能性もある。

## 山本芳翠 月下の裸婦

左下に「芳翠寫 CHAPLIN」

「留学中の後半期にはシャプランの筆意を真似て居った……氏の傑作として予の知っている限りでは細谷安太郎氏の所持している婦人の半身像で之はシャプラン流のもの」（黒田清輝「山本芳翠氏の逸事」『絵画叢誌』二二六、一九〇六年）

『美術新報』第二卷十四号（一九〇三年十月）の「時報」の記述（山本芳翠氏の撰写参考品ルナ（全身）より、白馬会第八回展参考出品作ではないかと推察されていたが、当時の次の新聞の記述を見ると別作品と考えられる。

「△山本芳翠氏の樹陰に舟を繋げる「風景」画是れも西洋に有りそうな景色にて、其色などより一見氏の筆たるを知る、参考部にある「月神セメン」はゴブラン織の模写にて其筆には画としての趣味は無ければ、氏が往年仏國に留学中始めて模写をやつたのが此月神とかなれば画家が苦辛修業の記念として観て一点の価値あるを認める、此次の展覧会には昨年伊藤さんの肖像のやうなものを見せて貰いたい」（半門生『毎日新聞』一九〇三年十月二十四日）

「△山本芳翠模写「月神セメン」之は作者が仏國で初めて模写したもので、原作は織物の下画だといふことである」（黒白子『中央新聞』一九〇三年十月二十一日）

※セメンはセレンの誤りかと考えられる。シャプランの原画がゴブラン織の製品になつて来たということであろうか。

「第二室……中央に最も人目を惹くのが月神の画で裸体の婦人が空中で月を弓にして引絞つてゐるのだ、元は仏國のサ

山本芳翠《天女》一八七八年



ロンに出たゴブラン織の下絵なのだが山本芳翠が初めて模写と云ふ事に手を付けた画で有るから日本の洋画史の上から見れば中々面白い物で有る。（四絃『都新聞』一九〇三年十月十三日）

芳翠は一八七八年から一八八七年まで滞欧生活を送っている。その留学最初の年である一八七八年の年記がある『天女』は三菱重工株式会社長崎造船所占勝閣蔵の縦一九三cm、横一二七・三cmの大作だが、これは三浦篤氏が指摘する通り、ジュールルイ・マシヤールが一八七四年のサロンに出品し、一八七八年の万博にも出品された油彩画《セレーネ》の模写であり、更にはこれが第十回白馬会に参考出品として展示された『月神セメン』であるのは都新聞の記事から明らかである。ただし、当時の多くの記事がゴブラン織の下絵と記していることは今後の検討を要するであろう。

右…ジュールルイ・マシヤールの《セレーネ》を原画としたタブーストリ  
左…ジュールルイ・マシヤール《セレーネ》一八七四年



芳翠が好んで模写したのはシャプラン、フランドラ、レンブラント、ベラスケスなどであったという。日本の洋画家志望者に一枚でも多く参考作品を持ち帰ろうと努めていた。（小林真之編「明治初期洋画家の留学とフランスのジャポニズム」『大手前大学比較文化研究叢書』十四水声社、二〇一九年）

## 《月下の裸婦》の原画

シャルル・ジョシュア・シャプランの *Seine baignant sur les nuages*（雲の上で眠るセレーネ）が原画である。二〇二〇年十一月二十四日のドグニー・オークション（スイス、ローザンヌ）で五千一萬スイスフランの評価額で掛けられて落札されている。



## 浅井忠 八王子付近の街

画面左下に「C Asai 1887」

### ほんとうに八王子？

同構図の作品にいずれも水彩の東京国立近代美術館蔵《山村風景》（三三・二×四二・一cm 表裏作品）及び東京国立博物館高野コレクション《青梅街道》（二二・三八×三六・二cm）、個人蔵の《上州風景》（二〇・八×三四・六cm）がある。四点とも同じ場所を描いたと考えられるが、タイトルが上州、青梅街道、八王子付近では実際にどこを描いたのかわからない。



《山村風景》東京国立近代美術館



《青梅街道》東京国立博物館 高野コレクション



# 曾我 蕭白

奇想 極 2021 10/8-11/21 愛知県美術館

重要文化財《時仙図屏風》（右隻部分）  
六曲一雙／紙本彩色 明和元（一七六四）年 文化庁蔵  
【一七六四～一七六五年までの展覧】

重要文化財《曾我子図》（右隻部分）  
紙本墨画 明和元（一七六四）年頃 福井県蔵  
【全公開展覧】

### 久米桂一郎 秋景

久米桂一郎日記より

「二八九二（明治二十五年）年八月三日水曜日 朝六時半比三分籠着 直二乗合馬車二乗り十一時半比パンボル着 馬車が待ツテ居タノデ直ニアルクエスト渡シ場二乗り附ケ一時比武玲城島二着ス」

※本当にブレハ馬なのか？鳥であり海に囲まれている。

「二八九二（明治二十五年）年十月二日日曜日 朝七時比ヨリ立出テ仕立屋大警トポントリユ村見物ニ行ク アルクエストヨリ四里斗アリ 数回夕立アリテ中々難儀ナリ 併シ途中ノ秋景色ハ面白シ ポントリユニテ昼飯ヲ喰ヒ頭ヲ刈ル 帰リハレザルドリユヲ通リ夕七時過島ニ戻ル」（久米桂一郎日記データベース）  
東京文化財研究所

### 作品裏に絵画あり

三人ほどの人物



### 今村繁三田蔵

ウィキペディアより…今村繁三（一八七七〜一九五六）は一八九九年に英国トリニティ・カレッジ（ケンブリッジ大学）に進学し、一九〇二年に文学士の学位を受ける。父親が亡くなったため帰国し、二十代半ばで莫大な財産を相続、父の残した今村銀行を引き継ぐ。今村銀行頭取、汽車製造株式会社取締役として、高輪の

アトリエ付きの豪邸に居住した。旧制中学の同窓にあたる中村春二が始めた成蹊園を岩崎小弥太とともに財政的に支援し、また、画家のパトロン（中村彝や會宮一念など）、花柳界の遊び人としても名を馳せたが、銀行の経営が悪化し、世界恐慌のあおりも受けて没落。邸宅を売り払い、所有していた美術品などを売りながら七十八歳まで生きた。

### 黒田清輝 暖き日

画面左下に署名等

「A Kisojaya Seiki-Kuroda 1897」  
額裏に黒田清輝遺作展覧会ラベル  
「画題京都白河 長尾建吉殿」  
日動画廊のラベル  
「暖かき日（京都白河村）」

磯谷商店の長尾建吉に贈ったものと考えられる（※長尾については安井曾太郎の解説を参照のこと）。

### 当時の作品名は田舎家（屋）？

展覧会でラベルの貼り間違いか

出品歴…一九〇五年 白馬会創立十周年記念展 上野公園旧博物館五号館「二五六 田舎家」  
同展の『記念画集』白馬会に「二五六 田舎家 明治三十年 長尾建吉君」とある。  
一九一〇年一月 『美術新報』九一三 扉水「現今の大家（2）黒田清輝氏」に函版「田舎家」（明治三十年作）として紹介されている。

一九二四年 黒田清輝先生遺作展覧会（東京美術学校）同展目録に「九七 暖き日 一、八九七 長尾建吉殿」  
一九二五年 和田英作編『黒田清輝作品全集』（審美書院）No.100「暖き日」はこの作品。No.99に「京都白河」という作品があり祇園の白川が描かれている。  
「京都白河」も長尾建吉所蔵であり、ひょっとすると黒田清輝遺作展覧会でラベルを貼り間違え、その後日動画廊のラベルにもそれが踏襲されたのではないかと考えられる。



### 房総の風景か

「一八九六年に長期間京都に滞在している（京都日記）が、一八九七年一月は房総に滞在。一月二十四日には「磯谷が額を持って来た」と日記にある。『記念画集』所収「三〇六 油画 上総日在村の海濱 明治三十年 和田英作君」とある作品はこの時制作した作品か。制作年も同じた久留米」のラベルあり。

作品裏には「一九二四年 黒田先生遺作展覧会 第六六号 上総日在村の海濱 所有 和田英作 一九四五年英作より 黒田清輝先生筆 1897年 上総日在村の海濱 所有 和田香苗」と記されているとのことである。  
※日在村は現在の千葉県いすみ市



黒田清輝（砂浜乾魚） 鹿児島県歴史・美術センター黎明館

### 青木繁 太田の森

サイン「T.B.S」

様々な解釈があるが分かってはいない。影響を受けていたラファエル前派流のサインではないかとは思われる。彼らは自分の署名と一緒に Pre-Raphaelite Brotherhood の頭文字である「P. R. B.」の文字を描き込んでいた。

### 作品裏の記述

「太田ノ森 青木繁筆」  
「神杉の木の間斜に飛ぶ星の 消えて跡なき太吉の寂寞 繁」  
※これは青木の詩「うたかた」の一節



日動画廊のラベル、一九七二年四月二十一日から七月十六日の青木繁展（東京・久留米）のラベルあり。  
作品掲載…『青木繁遺作展覧会図録』（青樹社 一九三九年 No.5）  
作品掲載…『青木繁画集・附・歌稿、尺牘と談片』（政教社 一九一三年 No.38「森」）

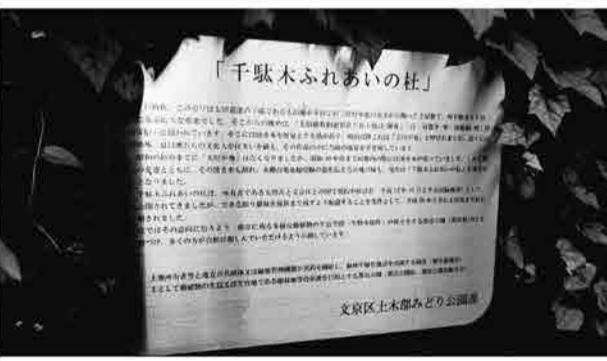
### ●太田の森

青木は一九〇三年に駒込道分町八十八の下宿から本郷区千駄木町六十五番地桑垣方の下宿に移り、森田恒友と同宿。この下宿が、坂本繁二郎が「太田の森の下の家」、森田が「千駄木の藪下の下宿屋」、梅野清雄が「根津権現裏の下宿屋」と呼んでいたものと考えられる。

江戸時代には太田撰津守（太田道灌の子孫）の下屋敷で、その当時は広大な敷地だったが、明治に入って屋敷は縮小、屋敷跡は「太田の原」と呼ばれて、そこには太田ヶ池があったという。屋敷の近くには森鷗外や夏目漱石らの文人が住み、小説の中にも周囲の風景についての文章が残されている。大正から昭和にかけて、現在の不忍通りに市電が開通し、市街化が進んだために太田ヶ池もなくなり、周辺環境も大きく変わっている。平成十三年に市民緑地として公開され、平成二十八年には所有者より文京区に寄贈された。



現在の太田の森（千駄木ふれあいの森）



ミニマル／  
コンセプチュアル  
ドロテ&コンラート・フィッシャーと  
1960-70年代美術

2022  
1.22 SAT — 3.13 SUN

Minimal/  
Conceptual  
Dorothee and  
Konrad Fischer  
and the Art Scenes  
in the 1960s and 1970s

次回展覧会予告

うたかた 青木繁

濁江のそのうたかたの消もやらず  
なげも敢へぬ我さだめ（戀路）かな  
墓の下それかしじまの躑躅手に  
真やみの淵の温みなき籠  
瀬に堰かれ淵によどみつ渦の輪を  
挽り泣くわかれなきさき

青春を忍の女神のいでたたし  
ひめぐと宣るか蘆の葉の風  
眞裸を水鏡する温泉や  
膚ぞ温くき百合の咲く谷  
黒髪をおどろに捲りて悶ゆる子  
世の初戀を呪はしと泣く  
解き髪に乳房を挿へ湯瀧浴む  
大理石のとり肌滑かき

ねくたれやもろ手を擧げて掻いけづる  
肩にうねりの蛇に似る髪  
緋鹿の子の  
引裂（ひきさき）に束（と）るねくたれの  
そのみだれがみ誰ゆるの嬌態（しな）

銀屏の野分の態や新妻の  
薄茶す手前うつりよき鬚  
鳴らす手に緋鯉真鯉の躍り寄る  
風温るき日を藤の花ちる  
欄に鯉にと魅をば投ぐる姫  
父左近衛はただほほまます

夕暮は心急かるる旅路かな  
山ひぐらしのかなかなと鳴く  
川水の朝な朝なに冷え増して  
關伽（あか）汲む鉢に浮ぶ紅葉  
晶（あか）き日を緑の波に子を抱きて  
人魚（下ゲル）の母の沖に泣く聲

きしきしと灘にさしたる上げ潮に  
人魚泣く宵月焼餅（つきやけあ）かき  
人面の白きに似たる睡蓮（ひつじぐき）  
ハイラスの名よ池のひめぐと  
森林に禮讃謡（らいさんず）する  
緋衣の婆羅門（バラモン）黧ふ  
帝利利（クシャトリア）

婆羅門の御手に阿俱尼（アグニ）の祭司壇  
羊の糞をいぶり捲く烟  
渦や我輪回の運命流れては  
またもともどりかくて年経る  
流れてはまたもともへ練りかへる  
渦に漂ふわが運命かな  
谷洞れて石あかあかと枯野山  
青空をゆく白ちぎれ雲  
石清水苔を流るるせせらぎや  
指を入れるれば響ひそむかな  
うらわかき戀やささやく眞清水の  
岩ばしる聲など陸まじき  
信濃なる佐久の平に残る雪  
野守が背戸に李花さく  
繪火桶に戸外（そと）を眺むる半被布の  
光琳の浪白砂のふき  
鐵綫のコオトを脱ぎておぼしまに  
よれるお召の海すきの君  
いなづまを額を越せて我を見る  
禮（あや）にうつむく初對面（はつみえ）の人  
向日葵の花いさぎよき姿かな  
丈すくすくと男の子の心  
青淵の踊ろきよみに主やすむ  
岩蔭寒し紅葉ちる谷  
このぬしはわかき女神と人のいふ  
唯青々と澄める淵かな  
晶々（あかあか）と峰に入日の影さして  
亮なく池をめぐる里路  
薬をば硯の水に注ぎけれど  
故國（くに）へのたより書くに物憂き  
風吹けば尾花置原さわかさと  
裏葉返へして鳴る河邊かな  
さめざめと雙廟（たまや）へ迫る青風  
木の間を流るる黄金の髪  
金鈴のをりをり鳴りて夏近き  
空にそびゆる朱欄の塔宇  
神杉の木の間斜に飛ぶ星の  
消えて跡なき太古の寂寥

おほ空を白雲渡る野路かな  
瀧見の駕籠のつれづれれに行く  
梶の葉に歌かき流す小ながれや  
日なたに瘦せし頬なでて見る  
庭下駄に飛石忍ぶ手櫛（てとし）の  
手を執りあへば散る櫻かな  
燈籠に火をば入れても見つかるかな  
秋や小雨のあまり佇びしき  
堀に倚り長いたづきの倦るき手に  
さめたる戀の歌府ながす  
淀にせきて流れもあへぬ歌くづの  
さまにも似たる戀の行末  
暮れぬれば繪の具を收め歸る路  
月なき谷を猿の聲する  
山やどりゑだくむ我のいたづきて  
繪まだ了へぬに秋の逝くかな  
駕籠の手に八里駄馬に三里して  
浅間の裾野草津への路  
谷道を唄の聲して下る馬子  
箱根八曲り人の影見ぬ  
鳥の燈を船の窓にちらと見ぬ  
鳴門を避けて瀬戸に入る夜半  
ほのぼのとまだ明けやらぬ春の海  
鷗のゆくへ追ふ夢ごち  
島山に雲宿りして暮るる空  
風に潮路の跡ほの白き  
窓明けて頼力なきひち杖に  
風なきに散る合歡の花みる  
故なくて唯さめざめと泣きし夜半  
知りぬ我まだ我に背かぬ  
振袖の重たき態に聲かけて  
うつつつづみの京の舞姫  
大原を嵯峨へと急ぐかり駕籠の  
後先となく蟲の聲かな  
飼狼の背戸吹きめぐる夜風に  
故里や戀ふ叫ぶ聲する  
手をとれば唯しげしげと我を見る  
うなるの病明日なき運命

安井曾太郎 パンと肉  
巴里のリユ・ド・セルシユミディの裏街  
の下宿で描かれたものらしい。一九一五  
年第二回二科展で特別陳列された瀟散作  
四十四点のうち的一点。一九四九年梅原  
龍三郎との遺贈記念合同自選展にも出品  
された。

磯谷商店製の額縁  
梅原龍三郎 横臥裸婦  
画面左上に年記、裏に墨書で「裸婦図  
一九〇八年十二月 巴里カンパニーニ  
ルミエ街 高村光太郎君アトリエに於て  
梅原龍三郎写 印」  
※梅原は一九〇八年七月にパリ着（高村  
光太郎は一九〇八年六月にパリ着）  
田中喜作とともに高村光太郎のアトリエ  
を訪ね、高村のアトリエと一緒にモデル  
を使って制作。

長尾建吉（一八六〇—一九三三）  
「額縁製造業の創始者として、又数多の  
作家の恩人として、多年我が洋画壇の為  
に尽した功労者であった。  
万延元年二月十日、静岡市磯谷利右衛門  
三男として生る。十五歳の時東京日本橋  
斎藤商会店員となり、明治十一年十九歳  
にして、巴里万国博覧会へ松方総裁随行  
員として渡欧、翌年静岡県嘱託として濠  
洲シドニー博覧会へ出張、同年帰朝した。  
同十三年三月渡米、五月小村侯等と英國  
に渡り、更に巴里に於て洋風家具を学ん  
で、翌年帰朝、長尾家の養嗣子となった。  
同二十二年上京し、山本芳翠と共に洋風  
家具及額縁の研究に従ひ、同二十五年芝  
愛宕町に洋画専門の額縁製造業を始め  
た。其後京都、大阪博覧会の洋画陳列を  
依託され、又同三十六年には、東京音楽  
学校に於ける日本最初の歌劇「オルフォ  
イス」の背景を山本芳翠を援けて製作し  
た。同三十七年常設展覧会場を京橋区竹  
川町に設け、翌三十八年工場及び店を芝  
区に移し、磯谷商店となし、美術雑誌  
「J.S」を創刊した。同四十一年文展の



陳列を命ぜられ、現在に及ぶ。大正三年  
大正博覧会に出品、金賞受領、同十三年  
東京日日新聞社より美術界功労者として  
金賞を受く。明治三十七年の有栖川宮家  
に於ける室内装飾金箔工事をはじめ、赤  
坂御所、聖徳記念絵画館等の額縁工事を  
承つて居た。昭和四年知友主催で鶴見花  
月園に於て、古稀生別会を催した。故人  
の伝記には、「嶽陽長尾建吉」（長尾一平  
編纂）がある。（『日本美術年鑑』昭和  
十四年版より 一部省略）

梅原による解説 一九五三年  
「これは高村光太郎君のアトリエで、高村  
君と一緒に描いた時代の作で、この年は  
マチスや、その後ずつと落伍したがヴァ  
ン・ドンゲンなどが盛んに個展をやって  
いた年で、そうしたものを、相当刺  
激されたと思われ、この絵もドン  
ゲンなどがかなり影響していると思う。  
こうした青っぽい真珠色みたいな色に  
なったのは、アトリエの光の関係からだ  
と記憶している。彫刻家のアトリエであ  
るために、地階でねずみ色の壁があつて  
少し寒い光だった。色が違っていたかも  
知れないが、そういう印象がある。  
ルノワールの影響とは少し違ったものだ  
と考える。  
今まで人に話さなかったことだが、私が  
ルノワールにひんぱんに逢い、ああいう  
立派な芸術家の生活を知る事を得たのは、  
非常にとくとして、他面そのために  
無意識だが自分に不自由になったとい  
うことを考へている。逢わなかつた方がも  
と存分におそれなく伸びて行けたのでは  
ないかと、内心思うことがよくある。だ  
んだんそう思つて来たのだが、しかしル

ノワールに逢つた事で、根本を迷うこと  
がないので、やはり結局は得をしている  
のかも知れぬが」。『日本現代画家  
選 梅原龍三郎 1』美術出版社 一九  
五三年）  
※高村光太郎は一九〇〇年にパリを発  
ち、イタリアを旅行してから六月に日本  
に戻つて居る。  
高村光太郎談話 一九五四年  
「梅原がある日カンパニーニブルミエ  
ルの高村の宿に姿を見せた。与謝野鉄幹  
からの紹介状をもつて田中喜作と共に挨  
拶に来た。これが初對面。京都式の美青  
年で、決してべらべらしゃべらず、ルノ  
アルが好きで会いたたい、というようなこ  
とをぼつぼつ言つていた。アトリエを  
持つていなかった梅原、カンパニーニ  
ブルミエール十七番のアトリエに誘つ  
た。モデルが二人替わる間一緒に仕事を  
した。  
最初のモデルはシユザンヌといつたかと  
思う。モデルの後に馬糞紙を貼つて、そ  
こに首がいくようなポーズをつけて、眞  
正面から梅原君は描いていた。バックを  
黄に塗つて、八号か、一〇号まではなか  
つたと思う。はじめてその絵を見て僕は  
びつくりした。なかなかいい。そんな年  
頃の筆とは思えないうまさがある。やは  
りルノアル風の流れるような描き方で色  
が非常にいい。インプレッソで一度み  
たら忘れ難いといつた強さがある。多分  
この絵に一週間か一〇日かかつたはずで  
ある。この絵は後に僕がもらつて持つて  
いたが、戦災でアトリエと一緒に焼けて  
しまつた。  
シユザンヌが完成してから少し間をおい  
て、も一度別のモデルで一緒に制作した。  
今度のモデルは馬車に乗つて通つて来る  
ような大変なモデルだった。月曜の朝、  
やつとももらえないかと画家の家にやつ  
て来るモデル達の一人なのだが、満艦飾  
に塗りたてて寄席芸人みたいな恰好をし  
ていた。面白いから描いてみようとい  
うのでやつたのだけれど、目の下も青く  
限取つて、その目がキラキラ光る。ロダ  
ンもこの女を使つていたのだがロダンの

「J.S」を創刊した。同四十一年文展の

ことをあの親命はフウ(キチガイ)だ  
などと云つていた。  
梅原君はこの女がソファに掛けてある姿  
を胸から上ぐらまで描いた。今度はシ  
ュザンヌより更に強くなつて、コバルト  
の澤山ついたものすこいような絵で、こ  
の青年はなかなかものになるな、と強く  
感じたことが今も頭に残つてゐる。この  
青年に比べると日本から来ている畫描き  
達は平凡なようで、梅原君はとび抜けて  
面白いと感じた。(一九五四年十一月十  
九日 高村光太郎談話筆記「パリの梅原  
龍三郎君」みづる)

### 山下新太郎 白耳義の少女

左上に「S. Yama' 091  
作品裏に「山下新太郎筆 ベルジューム  
の少女 非売品」ラベル、「44 白耳義少  
女 山下新太郎」ラベル  
いつベルギーの少女と会つたのか  
一九〇八年に渡仏した児島虎次郎が、グ  
レー村に移り一年間ほど滞在するが、そ  
の間に児島は齊藤豊作や山下と行動を共  
にし、切磋琢磨したと児島の日記に記さ  
れる。山下とは東京美術学校同窓の児島  
は一九〇九年には太田喜二郎を訪ねてベ  
ルギーを訪問し、そのまま同地で美術を  
学ぶことになる。一九〇九年にベルギー  
に赴いた記録は特に記されていないが、  
親しくしていた児島が一九〇九年にベル  
ギーへ移つた機に山下も同地を訪れて描  
いた作品であるかもしれない。

この少女については「金髪の美しいモデ  
ルでした」とのみ語つてゐる(ブリヂス  
トン美術館「山下新太郎 美術家シリー  
ズ3」一九五五年 より)  
一九〇五年四月に日本を發した山下は六  
月にパリに入り、一九一〇年六月まで主  
にフランスで留学生生活を送つた。  
一九〇八年七月三十日に児島虎次郎、齋  
藤豊作が滞在するグレー村に移つた。そ  
の記録が三人による「田園日記」として  
残されてゐる(『東京美術学校校友会月  
報』第七卷第三号(一九〇八年)、第四  
号(一九〇八年)、第六号(一九〇九年)、  
第七号(一九〇九年)、第八号(一九〇

九年)に掲載された)。山下は淋しくてた  
まらなくなつたようで、八月十四日にパ  
リに戻つた。

『児島虎次郎略伝』(児島虎次郎伝記編纂  
室、一九六七年)によると、一九〇九年  
七月一日午後山下は和田三造、柳敬助  
とともに児島を訪問している。同月十三  
日に児島と山下はベルギーを訪問するこ  
ととしていたようであるが、山下の都合  
が悪くなつて児島一人でベルギーに移動  
してゐる。この都合の詳細は不明である  
が、ちょうど七月にルノワールの小品を  
直接買い求めるために、梅原龍三郎、有  
馬生馬とともにルノワールを訪問してい  
るので、そのためにベルギー行を止めた  
のかもしれない。一九一〇年にベルギー  
オランダの美術館見学を行っている。

額裏の文字 サムハラと読む



江戸期に怪我除け、虫除け、地震除けな  
どとして信仰されたサムハラ文字が、明  
治期になって日清戦争において玉尾需が  
護身札数十万枚を出征軍隊に寄贈したこ  
とで、新聞に取り上げられ、昭和に入つ  
て田中富三郎が万年筆業にサムハラ文字  
を利用、様々なサムハラ商品を販売し、  
戦後のサムハラ神社創建につながつた。  
大阪にサムハラ神社、岡山県津山市にサ  
ムハラ神社の奥の宮がある。同神社の信  
仰においては「サムハラ」は、「天御中主  
大神」「高産皇日大神(高皇産靈大神)」「神  
産皇日大神(神皇産靈大神)」の総称で、  
この造化三神が「サムハラ大神」と称さ  
れてゐることに由来。(渡邊一弘「サムハ  
ラ信仰についての研究」『国立歴史民俗博  
物館研究報告』第一七四集 二〇一二年  
三月より)

### 中村彝 少女裸像

裏木枠中央に「J. I. BUMPODO」印  
手書きで「1914」  
木枠右側に「少女 中村彝氏作 大正三  
年三月廿七至七月三十一日 東京大正博  
覧会美術館出品」  
右上に「彝」※書き印のようなスタイル



文房堂の額。「二」は創業者の池田治郎  
吉のイニシャルか? 文房堂は明治二十年  
(一八八七年)六月六日創業。  
裏に少女の姿はつきり  
画面裏はネガのようにくっきりと表側の  
少女の姿が写る。  
出品歴・一九一四年東京大正博覧会(少  
女)。一九二五年の遺作展(画廊九段)  
でも出品された。  
この頃相馬家の長女俊子を集中的に描  
く。この作品は俊子の通う女子聖学院の  
校長から展覧会会場からの撤収を要求さ  
れたという。  
「血も紅にもじみたる、若き肉の喜びを  
画いたのであらう」(『美術新報』一九一  
四年五月)  
坂本繁二郎 海岸の家  
裏面に「大正四年八月十六日大中里」  
「坂本繁二郎 富士裾野を写生旅行中」  
(『読売新聞』一九一五年八月十四日)  
とあるとおり、描かれてゐるのは現在の  
静岡県富士宮市大中里のことと考えられ  
る。  
岸田劉生 高須光治君之肖像  
一九一五年一月二十日制作。羽根飾りの  
付いた盾形の紋章があらわれる。

出品歴・一九一五年 岸田劉生作品個人  
展覧会(五月二十七日〜六月二日 京橋  
美術店田中屋)  
一九一五年 現代の美術社主催第一回美  
術展覧会(十月十七日〜三十一日 銀座  
読売新聞社)  
一九一九年 白樺十周年記念主催岸田劉  
生作品個人展覧会(四月九日〜十六日  
京橋・日本電報通信社)  
高須光治(一八九七〜一九九〇)  
豊橋市出身。一九一五年、十七歳の時に  
代々木の劉生の家を訪れ、椿貞雄らと共  
同生活を送ることになった。第十五回異  
画会《母におくる像》で三等賞銅牌を受  
賞し、草土社の結成にも参加した。劉生  
は一九一五年に高須の肖像を三点描くが、  
一点はコンポジションが気に入らないと  
いつて一日で止めたもので、もう一点は  
十二月二十二日付の肖像で豊橋市美術博  
物館が所蔵している。

木村莊八 壺を持つ女  
作品上部には署名と制作年月(一九一五  
年二月)、女性が持つ壺には「Tommy  
Wood」と記されている。また、作品裏に  
は「瓶を持つている女 1915年2月  
作 木村莊八」との記述がある。  
この作品は最初に異画会第十五回展(一  
九一五年三月二十一日〜四月十日、上野  
竹之台陳列館)に出品されている。異画  
会は日本画家の団体だったが、一九一四  
年の第十四回展の時に洋画部を新設した。  
翌年二月における第十五回展の洋画部審  
査委員は岸田劉生と木村が務め、木村は  
《女の肖像》《快晴の冬の目》《樹の下に遊  
んでゐる子供(習作)》とともにこの作品  
を出品した。出品時は「瓶を持つてゐる女」  
というタイトルであり、その後一九一六  
年の第三回草土社展(十一月十一日〜十  
七日、赤坂溜池・三會堂)にて出品され  
ている。この再出品について記されたの  
が同展目録所収の次の文章である。

「瓶を持つてゐる女」の出品に就て木村莊八  
此度の自分の出品には人物が多くなつた  
が、その中に「瓶を持つてゐる女」を再  
出陳したに就て特に一寸断つておく。(詳

しくは雑誌「燃ゆる叢」創刊号に書く筈)である。然し元より敢て誤解を求めるも  
旧作をいろいろ再出陳したのは元よりよ  
り善く自分の今に至る系統を語りたい為  
めであつたが、さうする上に於て(殊に  
人物に対する愛の系統に於て)「瓶を持  
つ女」は特別に再出陳の必要を感じた。  
一体此の絵は素直に愛せない絵であ  
る。構図(乃至は構想)に於て先づ第一  
に欠点がある。此絵の「作者」は善い絵  
を描かうとあせつてゐる。要求が浮いた  
それが此の絵の欠点即ち構図に冷やかさ  
のある起因だ。然し作家はその動機に於  
てばかりに製作はしなかつた。即ち此の  
絵には、部分に作家の無垢の愛、無心に  
自然と取込んだ純な作画の跡がちんで  
ある。即ち要求が要求それ自身に於て語  
られてゐる。それは此の絵の美点だ。そ  
の欠点と美点と、果して何れが作家の素  
質に律する本質か、何れが一時の現象か  
は、自分の近作がそれをよく正義化する  
筈と思ふ。此の絵はかう云ふ出品のセ  
リーに於て在れば自分の美質を語る旧作  
の一つである。然しそれ一つに切り離す  
とこの不幸な娘は父を裏切る。人は作家  
を誤解する事が或る正当な此の絵との交  
渉の一つとなる。元来此の絵はさう云ふ  
絵である。一面に於て自分でなければ描  
けない絵、又一方から云へば描かない絵、  
そして後の近作を描いたのも自分、今改  
めて此の瓶の絵を出品するのも自分、要  
は自分をかくあつた、かくある、且かくあ  
るであらうまゝに公表したいと思つて、  
此の絵も此度の出品に加へた。この神経  
は、直接には春の個人展覧会に此の絵を  
取て出せなかつた或る神経のつゞきであ  
る。人は何に依つて自分がその旧作を事  
新らしく愛に於て見るかを見てくれ、ば  
い、之れは理想的観者への注文だが、  
自分にはわりと平気でかう云つてゐる様  
に見えるかも知れない、が、此のゆとり  
の裏にはかなり辛い感情も苦しい試練も咀  
嚼した。要は近作が自分にかなり深い自  
信と落付きとを齎らした結果である。且  
それははつきりと自覚する此の展覧会の  
自分の事実だ。自分は今誤解を恐れな  
い、露骨に云ふと確かな征伏欲を持ち合せて  
ある。一方他人をより多く愛に於て見

瓶の絵その他此の出品中の或るものは、  
此の展覧会を終ると一先づ長く安心して  
旧作のうちに静かに蔵つておける機会を  
得るだらう。自分の伝記は自分で始末し  
たい希望を僕は殊に多く持つてゐる。そ  
の点に於て一体展覧会と云ふものは我々  
画家の伝記の優なる項目を占める事件だ。  
製作の愛が分けて云へば「人物」に一  
寸寄つたので此度は僕には珍らしく風景  
が少ない。主にその為めだが、手元にあ  
る旧作の中でも最も自信のある、即ち愛  
の純粹に於ける、二年前の八号を二枚又  
出して置いた。此の頃の或る絵は今後も  
幾度も出す機会を持つたらう。毎年の展  
覧会にいつも並べたい旧作ばかりで自分  
の「過去」が縫はれ、それは永く自  
分の「現在」の定定の根、又未来への切  
望だ。此の気持がわかつて貰へないと自  
分の出品し方はうろさく思はれ想だ。  
以上、極く短かく出品に就て云ひたい  
ことを云つた。「空気を待つ少年」は、  
材料が材料なので対象と取組むそばから  
そばからと取組が複雑に、且微妙になつ  
て、今もまだ取組の最中だが毎日の必  
然をまざまざと見るのでどうも物足りな  
い。取組んでさへるれば、然し或る清  
足はあるし、あと五日あれば先づ出来る  
見込みも立つし、みすみす公表の機会を  
半歳後にのぼすのも気になるから意外に  
調子の狂はぬ限りは出せると思ふ。何し  
ろあとからあとからと仕事の山が欲望の  
野にくずれて来るので、中々まだ完成の  
味は一つ絵には思ふ通り出せない。実に  
字義的に勉強の上にも勉強万事の時代だ。  
(此度こそはと云ふ自身の幸福なゆとり  
に於て 十一月六日午前記。急いで)

異画会第十五回展洋画部の出品者を中心  
に一九一五年十月十七日〜三十一日に読  
売新聞社にて「現代の美術社主催第一回

美術展覧会」が開催され、それが実質的に第一回の草土社展となった。翌年四月一日より十日に第二回展（銀座・玉木美術店）が開かれるが、その出品目録に木村は「此の展覧会の自分の出品に就て」と題した文章を寄稿している。その中で木村は「一九一五年の或る期間自分が自分の道に就て焦慮と迷ひと疑ひ及び特にそれに対する早計な見方をかなり敢てし」と告白している。この焦慮の時期が「瓶を持つてゐる女」の制作時期と重なるのかどうかは不明である。

なお、X線写真から、この作品の下に筆を持った人物らしい絵が描かれていることが分かつている（『修復研究所報告』vol.5 学校法人高澤学園 一九八七年）。また、「此の展覧会の自分の出品に就て」において木村は、塗りつぶしてしまつた作品があり、そのこと残念に思つてゐることを記している。

### 河野通勢 自画像

右上に「1917 Dec. 21 m. Kouno」

一九一七年十一月二十四日、野村定吉の二女光子と結婚。通勢が描いた肖像画の中にはこの妻のものも含まれている。

参考：『東京朝日新聞』一九一七年十月二十八日（本作品とは別の自画像についてのコメント）

「之に反して研究的試作的な作品ならば夫が文展式洋画の型を破つた者でも、或程度まではドシドシ引上げて行かうとおふ奨励方針らしいものが見えて、而も今年には殊に其傾向が著るしくなつて来たやうである

例せば河野通勢氏の「自画像」保田龍門氏の「母と子」等の如き真摯な作品、或は寺崎武夫氏の「飛鳥朝の夢」の如き珍らしい試み：兎に角若い者でなくてはたくらぬ、何處となく捨て難い味のあるものは拾ひ上げる、といふ方針がある、自由な芸術は必ずしも二科会を待つに及ばぬと云ふ、或可能性を見せて来たのである」（坂崎坦「文展西洋画評 一」）

### 大沢鉦一郎 シンベを着た少女

日本美術院再興第七回展（一九二〇年九月）入選、第三回愛美社展（一九二一年三月）に出品している。



第三回愛美社展出品展覧会 会場写真  
右から（少女像）（白菊）（静物）（シンベを着た少女）（一九二一年三月）  
名古屋画廊「大澤鉦一郎画集」二〇一七年より

次の二つの院展評では草土社で岸田劉生とともに活動を行った椿貞雄（一九八六〜一九五七）の作品との関連が念頭に置かれている。

「大澤鉦一郎氏のシンベを着た少女も椿氏のカテゴリの中に入るべきものであらう。（退生『やまと新聞』一九二〇年九月十三日）

「大澤鉦一郎氏の「シンベを着た少女」といふ画も多少共通した所をもつてゐる。が、これは椿氏のものに比べると余程破綻が多い。此のスタイルで纏めるにして大分欠陥があるのが目立つてゐる。斯うした田舎少女の表情は一寸出てゐるが、身体のかなしに少し作りつけた様な気味がある。右の手首などは殊にそれが激しい、まるで木彫細工である。少しアカデミイの先生染みた云分だが此画は纏める事を急いで、土台の素描を疎かにしたのぢやないかと思はれる。」（黒田重太郎『中央美術』一九二〇年十月）

次の愛美社展評の執筆者は黒田重太郎の評を読んでいたのかもしれない。「愛美社展覧会を見る」

### 清水登之 ワーガーデン

一九二三年にジョン・スローンが購入。一九二四年にスローンによる選抜展（ホイットニー・ステュディオ・クラブ、ニューヨーク）出品される。清水の師であるジョン・スローンが自身の版画二十枚と交換して入手し、スローンが企画した上記の展覧会に出品された。

CHRISTIE'S 一九八九年十月十七日 LOT238で「Construction Site」という題名で出品されたために建築現場という題名になったと考えられる。

「ワーガーデン」は三重県立美術館所蔵清水登之作品も war garden を取材している。清水の一九二三年日記にも war garden で労働したことが記されている。

Charles Lathrop Pack による「The War Garden Victorious.（一九一九年）」によると、戦時において、労働者は農作業に従事できず、鉄道輸送も負荷がかかっているため、平時とは別の場所で作られる必要が生じていた。Pack は一九一七年三月、既存の耕地に頼らずに「War gardens」に作物を植えるように合衆国の人々に提起した。合衆国参戦の数週間

前 Pack は National War Garden Commission を立ち上げた。フランスでもロシアでも兵士となったものの多くは農民だった。戦いが繰り広げられた地域の農地からは男性労働者がいなくなった。また戦争でヨーロッパの多くの農地の作物が駄目になった。こうして食料の需給バランスが崩れていった。War Garden の必要性は充分であった。

画面内の「ISABELLA HOME」の表示をおそらく、ニューヨークの老人福祉施設を示すものと思われる。Anna and Oswald Ottendorfer が一八七五年に早世した娘の Isabella の名を冠し、その遺志を継いで高齢女性のために福祉施設として創設したもの。その左下の表示はよく読めないが、最初の部分は「HOSPITAL ST」と記してあるのか？

前田寛治 褐衣婦人像  
右「K. Maeta 1925」

他の作品にも同様の年記があり「1925」に見えるが一九二四年頃としている。

出品歴：一九二六年 第七回中央美術展覧会《少女》  
一九三〇年 一九三〇年協会第五回洋画展覧会《褐衣の少女》  
一九三一年 前田寛治遺作展《褐色の婦人》  
一九二二年十二月に横浜を出發し、一九二三年二月にマルセイユ到着。一九二五年七月一日にパリを出發、八月下旬に神戸で下船した。一九二五年にはジャクリヌ・ショーダンモデルに作品を残し、この作品もジャクリヌがモデルと伝えられている。

### 神原泰 生命の流動

第二回アクション展出品作  
一九八九年頃の作家自身の記憶によれば《生命の流動》は第二回アクション展に出品したものという。同展の出品目録はない。一九二三年の第一回展には《あるベシミストの手記》出品。一九二四年四月に三越、五月に松本市東築摩郡役所で第二回展。神原は「リズムカルな色彩の鮮麗さ」出品。

「生命の流動」への拘り  
イタリア未来派マリネッティに捧げた『第一回神原泰宣言書』では「霧閉気、生命の流動、自然の律動を無視した現代日本の絵画を非難」

「これからの表現が採るべき方向は流動する生命そのものを愛と直感によって把握することである」

「芸術は真実でなく必然性を体現すべきであり、「不断に流動し生長する生命の実相」こそ必然である」

「前田寛治氏の画風は昨秋帝展で特選になつたのもさうだが一特色あるものである。それは意識的に色の数を制限して居るやうに見える。『少女』の方は褐色の一色董のやうなものだが面白く『卓上静物』の背景を単なる墨の塗抹にしたのは一寸合点が行かない。尤も出品された時

まだ塗りたてであつたから、余計調子外れに見えたかもしれない。』

### 藤田嗣治 青衣の少女

作品左下には「巴里 嗣治 Foujita 1925」と記され、額裏の枠にも「Foujita 巴里 嗣治 DEC 1925」の記述がある。

一九二五年に藤田はフランスからレジオンドヌール勲章（シュヴァリエ）、ベルギーからシュヴァリエ・ド・レオポルド勲章を受章している。ヨーロッパにおける藤田の評価が定まってきたことがわかる。

小出橋重 蔬菜静物  
画面右上に「N Koide」  
作品裏に「蔬菜静物 大正十四年十月 小出橋重 Nature Morte N Koide 1925」

私の蔬菜静物に就いて（『みづる』二二四八号、一九二五年一〇月）という一文を記している。

「自分の絵に就いては自分の絵が一番何もかも物語つてゐる事であるので、何んともかく事柄がありません、たゞあれだけのものですが、昨日黒田君や國枝君と



私の蔬菜静物に就いて 小出橋重

小出は本作品と同年に制作され第十二回二科展（竹之台陳列館 一九二五年九月三日〜二十九日）に出品された《蔬菜静物》（東京国立近代美術館蔵）に関して、「私の蔬菜静物に就いて」（『みづる』二二四八号、一九二五年一〇月）という一文を記している。

陳列を終った会場内を眺めてある。黒田君が私の絵の前で西瓜が舌を出してゐると申しましたら國枝君がトマトが目むいたと云ひました。ナル程さう云へばきうりがくみやみから手を出してゐます、自分は何も気づかず居ました。程と思ひました、君の絵は妖気をふくんで居るぞと黒田君の言葉で成る程自分の事は他人の方がよく知つてくれてゐるものだとこれにも感心してしまつた、國枝君はこの色調は昔の幻燈のおぼけの様だとも云ひましたが、それもその通りです、すべて批評はかう行かねばなりません、自分の感想の代りとして確かな他人の噂を紹介して置きます。」

当館所蔵の『蔬菜静物』は小出がこの一文を認めた（一九二五年九月頃）後の十月に描かれてゐる。文中の黒田は黒田重太郎、國枝は國枝金三のこと。小出が一九二三年に同時に二科会員となつたはずれも関西出身の黒田、國枝、鍋井克之らと共に一九二四年に信濃橋洋画研究所を開設したことは、大阪、ひいては関西の洋画壇発達において特筆すべき出来事であつた。

**小島善太郎 房州風景**  
画面左下に「1930 ZNTARO. KOZUMA」  
画面裏にキャンバス下部分巻き込み。その下に「1927 Z.kojima」  
画面裏 出品ラベル「東京府下駒沢町下馬五五五 ■■■■ 風景」

一九二七年に制作し、一九二八年二月に出品、一九三〇年に描き直したと考えられるが、一九三〇年協会展第三回洋画展覧会当時（一九二八年二月）の作品写真と比べると、既にその時点で巻き込まれた部分には写真に写つておらず、「1927」のサインも見えていない。一九二八年の出品時点で絵画のサイズは既に現在と同様となつていた可能性が高い。その上で、右下に濃い緑色の木が描き重ねられ、左端中央の木の一番下の枝の葉も描き加えられたと思われ。



帰国直後の一九二四（大正十三）年、結婚すると同時に荏原郡駒沢町下馬五五番地（現・世田谷区下馬）へ新居をかまへてゐる。一九三二（昭和七）年、小島はさらに東京の市街地から離れた南多摩郡加住村中丹木（現・八王子市丹木町）のアトリエに移住してゐる。

一九三〇年協会展第三回洋画展覧会（上野公園内日本美術協会 一九二八年二月十日〜二十六日）に『秋』三百円、『冬』五百円、『ダリア（一）』三百円、『ダリア（二）』五百円、『裸婦』三百五十円と『桃』三百五十円と出品された。『房州風景』は五百円。一九三〇年協会展第三回洋画展覧会（房州風景）に再録）

●一九三〇年協会展は佐伯祐三、小島善太郎、里見勝蔵、木下孝則、前田寛治がフランスの一九三〇年派になぞらえて命名し結成した美術グループ。

「私の画きたいもの  
つい他人のよい作風を見ると、頭にそれが出易くなるのですが、私は平易に平凡に、あるまゝの中から自分だけの気持ちと出来るだけ確実に画いて見たいと思つてゐます。それが私に一番自然であり、又楽しみでもあるからです。私は頼れた魔屋とか、全く都会から縁のない、さびれた風物に心から曳かれます。昔風な、素朴な、純情の世界が懐しく、恋しく、親しいからです。そしてそういったものを画き度いからです。…（小島善太郎）『セレクト』一九三〇年五月より『桃李不言』画家小島善太郎随筆集 一九九二年に再録）

**中山巍 青背坐婦**  
一九二八年のズボロフスキー（モディリアーニの個展を開いたことで有名なポーランド出身の詩人）の画廊における個展に出品され、翌年一月の第四回一九三〇年協会展に特別陳列滞欧作品として出品されたと考えられる作品。額裏の木枠には一九三〇年協会展用と思われる出品票が貼られており、住所欄には東京市外杉並町天沼の前田寛治方を記している。  
《青背坐婦》出品ラベル

**里見勝蔵 裸婦**  
画面右下に「K. satomi」  
読めないが一九三〇年前後の他の多くの作品と同様のサイン

一九三〇年十一月発行『里見勝蔵画集』（建設社）に掲載された「十一 女 一九二八年作」とポーズ、背景等酷似している。画集掲載作品は女性を描いた左下部分のみをトリミングした感じ。右足の置き方が異なり、画集の作品では右足部分にサインが記されている。

**村井正誠 ゴルフジュアンの船**  
左下に「naganari」  
作家によって他の作品の下張りに利用されてきたという。

そつくりの作品目黒区美術館にほとんど同内容の作品が目黒区美術館にある（九九・七×八〇・三cm）。目黒の作品では作品裏の部分に「naganari 1929 ゴルフジュアンの船 正誠」と本人自筆と思われる記述がある。

一九二九年一月十五日〜三〇日に開催された一九三〇年協会展第四回展（東京府美術館）に類似した作品が出品されたと言ふが、この画集の作品のことであろうか。一九二八年頃から三〇年頃まで裸婦作品制作が続く。

目黒区美術館（ゴルフジュアンの船）裏面  
画像提供：目黒区美術館

一九二九年に南仏、イタリアに旅行しているため、この制作年となっているのか？  
一九二八年四月〜三二年六月までヨーロッパに滞在した。《ゴルフジュアンの庭 No.1》（東京都現代美術館蔵）という作品

**満谷国四郎 裸婦**  
作品裏に次の内容のラベル  
摘要「裸婦 △ 30」大阪市東区今橋二丁目「前田熊太郎」殿御所蔵  
「返送先 前田氏 ■ 三角堂」  
昭和十二年三月 於東京上野公園日本美術協会陳列館 満谷国四郎遺作展覧会

次の作品も同モデルを使用した一連の作品と考えられる。  
一九三〇年三月八日「朝日新聞」掲載の太平洋画会出品（裸女）

一九三〇年制作となっている。これは第十九回二科展（一九三二年）に出品されている。和歌山県立近代美術館の《ゴルフジュアンの朝》は一九三四年制作となっているが、これは第四回独立展（一九三四）出品。一九三五年五月の第十二回新時代洋画展に《ゴルフジュアンの船》が出品されているが目黒と愛知のどちらの作品なのか、もしくはそれ以外なのかは不明。

**林武 石膏像のある静物**  
石膏像が二つ 卓上に人參、茄子など。  
左下に「Takechi. H 1931」

一九三一年九月十九日〜二十九日の独立美術協会秋季展（有楽町・朝日新聞社）に出品。

ミケランジェロの瀕死の奴隷とファルコネのヴィーナス坐像と言われる石膏模像。ファルコネ（一七一六〜九一）は、「大理石よりも石膏に即して勉強するほうが確実に容易といえ、驚かれるかもしれませんが、これは真実なのです。後者はごく細部まで固くしつかりしていますが、前者はときとして曖昧不確定な細部を示しますし、ときによっては、その細部さえ消え入ってしまうのです」と述べている（金井直「石膏模像の機能」と石膏デッサンの様式」）。

石膏模像は鑑賞対象、描写対象、研究手段、教育手段としての役割を有するが、日本においては描写対象、教育手段としての位置づけが強い。ヨーロッパでは一七五三年にファルセッティの石膏模像群がヴェネツィアに送られて公開され注目されるなど、石膏模像のコレクションが拡充されて鑑賞対象となる状況にあった。アメリカでは大学において美術史研究のために石膏模像収集が行われ、ボストン美術館では一八九一年の時点で八百点近い石膏模像を収蔵していた。この点において描写対象、教育手段としての位置づけられた日本とは大きな差がある。日本では里見勝蔵《石膏像のある静物》（一九二七年 二科展 東京国立近代美

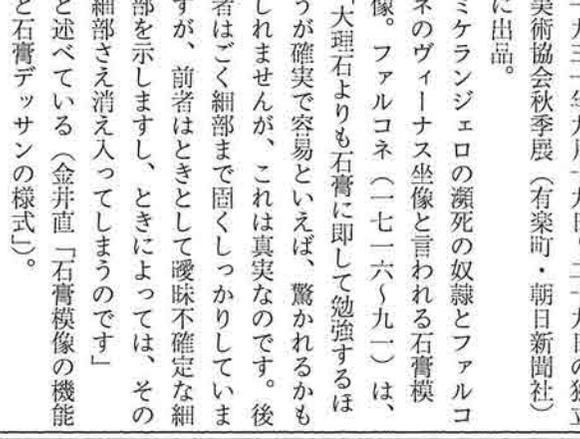
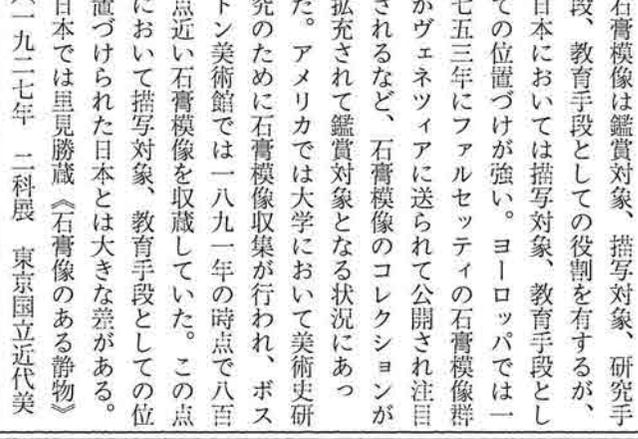
**村井正誠 ゴルフジュアンの船**  
左下に「naganari」  
作家によって他の作品の下張りに利用されてきたという。

そつくりの作品目黒区美術館にほとんど同内容の作品が目黒区美術館にある（九九・七×八〇・三cm）。目黒の作品では作品裏の部分に「naganari 1929 ゴルフジュアンの船 正誠」と本人自筆と思われる記述がある。

一九二六年の『大阪市商工名鑑』による大阪株式取引所（東区北浜二ノ一大株附属館三階）の短期取引員。一九三六年の『商工業者名鑑』では大阪株式取引所（東区今橋二ノ三十一）の一般取引員。

一九三八年の『日本實業商工名鑑』昭和十三年度版でも大阪株式取引所（東区今橋二丁目三十一）の一般取引員。

大阪の北浜にあった「前熊商店」のことであろうか。





昭和十八(一九四三)年八月二十四日 一週  
西田惠泉宛野口謙蔵書簡 個人蔵

日中戦争から太平洋戦争期にかけての日本では、絵筆(彩管)を執って国に尽くす「彩管報国」という理念の下、多くの画家が戦地に派遣され、さまざまな戦争記録画が描かれた。

昭和十八(一九四三)年、戦争記録画の作成を決定した陸軍省から画家の推薦依頼を受けた滋賀県は、まず野口謙蔵に打診する。しかし、野口謙蔵が病氣などを理由に辞退したため、滋賀県は惠泉に交渉し、その結果惠泉が派遣画家として推薦されたのである。この書簡は、惠泉が戦地へ向けて出発する前日の昭和十八(一九四三)年八月二十四日に、野口謙蔵から惠泉に宛てて出されたもの。二十五日夜に郷里を發つた惠泉は、二十七日に宇品港(広島県)を出航。フィリピン・ルソン島で半年を過ごし、昭和十九(一九四四)年三月二日に帰国している。

**児島善三郎 伊豆の海**  
左下に「zenaburo kojima」  
裏に「伊豆の海 児島善三郎 五十八歳」

第一回サンパウロ・ピエンナレに出品する。(10・6於サンパウロ近代美術館)「伊豆の海」118

**山口薫 ボタン雪と騎手**  
額裏に「ボタン雪と騎手」山口薫

第三回モダンアート展(東京都美術館 一九五三年二月二十一日〜一九五三年三月五日)で山口は《林の幻影》《広場の十字架》《ボタン雪と騎手》を出品している。

現状と異なる図柄  
回顧展図録に  
一九六九年の『山口薫回顧展』図録掲載の《ボタン雪と騎手》図版と現在の作品では描かれた内容が異なっている。  
描き重ねられた可能性が大きい(別作品という可能性もないことはないが)。日動画廊のラベルでは「一九五一年作」と記されている。



「山口薫回顧展」一九六九年図録掲載の《ボタン雪と騎手》

第三回モダンアート協会展に出品されたというが、当時の図版も諸事再確認が必要。また、サインが「一九五八年」に見えるという指摘もある。  
山口は一九六八年五月に亡くなっているため、一九六九年の『山口薫回顧展』図録の図版の作品が展覧会終了後に描き直されたことはない。一九六九年に既に出品作品は現在のようになっており、図録の図版が間違っていたのか、同タイトルで二点の作品があるのか、などなど現状では判断できない。図録掲載《ボタン雪と騎手》図版と現在の作品は異なっているとはいえ、構図等の共通点が多い。



木枠の使い回しはか? 作品裏に第三回自由美術家協会展覧会のラベルあり (一九三九年)

作品題名は恐らく「南風」。  
《南風》は何必館・京都現代美術館所蔵で一三〇×一六〇cmとあるので《ボタン雪と騎手》(一三〇・三×一六二・一cm)とほぼ同サイズ。

**田淵安一 有機的表象**  
画面右下に「Yasse Tabuchi 55」

この作品は一九五六年十一月に朝日新聞社主催による「世界・今日の美術展」(日本橋高島屋)に出品されたもの。同展は世界の新しい美術動向を国内作家の作品と合わせて展示した当時最大規模のもので、フランス、アメリカ、イタリア各国から集められた海外作家四十七人、七十六人と、日本人作家六十人、六十点で構成された。田淵にとって渡仏後初の日本での作品発表の場となった。

**岡本太郎の推薦**

田淵の参加は、懇意にしていた岡本太郎が同展の作品選定の中心人物であったことから実現した。岡本は、前年の一九五五年七月にも、第四十回二科展第九室の一角に、自身で呼びかけた国内外の作家の作品を展示する通称「太郎部屋」への出品を田淵に打診しており、田淵を日本画壇に紹介すべき画家として認識していたことが分かる(久保田有寿「田淵安一 1951-1961 同時代資料に見る評論の軌跡」『愛知県美術館 研究紀要』第二十三号、二〇一七年)。

**杉全直 窪んだ空間 B**

「色の境が主題だった。色が爆発するその空間。——こういう絵は説明不能。しかし、それが自分の心と合う快いものだ。いい音楽を聞いたような」というよりも造形的な快さがある。(一九八〇年の「東京藝術大学退官記念 杉全直展」会場で自作説明をした際に聞き書きした内容より)

**現代日本美術展出品作**

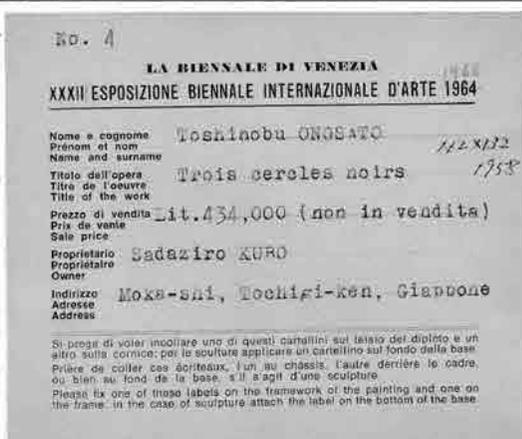
《窪んだ空間A》(倉敷市立美術館蔵)とともに第三回現代日本美術展に出品されて優秀賞を受賞している。毎日新聞社主催の日本国際美術展が隔年開催となったことにもない、一九五四年より同社主催で現代日本美術展が開催されることになった。その後は日本国際美術展と現代日本美術展が交互に実施された。

**オノサト・トシノブ 三つの黒**

国立近代美術館京都分館で一九六四年に開催された「現代美術の動向展」、一九六六年の第三十三回ヴェネツィア・ビエンナーレ他多数の展覧会に出品されているため、額裏にはラベルが多く貼り付けられている。



XXXIII Biennale Internazionale d'Arte di Venezia - 1966



LA BIENNALE DI VENEZIA XXXII ESPOSIZIONE BIENNALE INTERNAZIONALE D'ARTE 1964

ヴェネツィア・ピエンナレ出品ラベル  
南画廊のラベル「Onosato No. 4 THREE BLACK CIRCLES 1958」  
神奈川県立近代美術館鎌倉のラベル  
戦後の現代日本美術 三つの黒 オノサト・トシノブ 9月20日〜11月8日 1964年  
また、一九六一年七月五日発行の「朝日ジャーナル」の表紙を飾っている。美術評論家として知られる久保貞次郎の旧蔵作品。

**オノサト・トシノブ 「丸」と「卵」**  
「丸」を描く養鶏家  
より「藝術新潮」一九五八年七月号

「(前略)今までの絵の様相としてあり得たりアリティの根本になっている附加物を一つ一つ捨ててゆくこと、具象的形態だけをなく、具象的形態のもつ役割がただその姿を隠す非具象絵画をも含めてそれを捨て去ること。思想性とか、社会性とか、人間性とかいわれるものの完全な放棄—絵画的といわれるものからの断絶が起ればよい。(中略)

丸が同じ大きさであることは情緒に流れることを救う。丸い形は画面に意味を附加したくないしるしである。縦横の線は立体的ではない画面(平面)に、立体の暗示を与えることをさける。「丸」は円でもなく、球でもないまるい形である。丸い形は幾何学的な円よりも自由であると思われる。「丸」という限定が与えられ非常に制限された画面構成の中に感動の持続があり得るとすれば、そこに「今」の意識が常に場所を占め、制限が次への移行の意識の段階をより鮮明に導くであろうと思うのだ。それは様式化ということに由来したものではなく、画の絵画的なものの変質がこの感動らしくない感動をより自然な、より原初的な欲求から人間的な純粹感動に到達することのために取られた手だての結果である。(中略)

神はここにはいない。自然人として、より正確な科学的思考と事物に対する正しい判断が可能な人間の思考を宇宙的にとたえること。事物への関心を絵画的に捨て去ることによって事物の意味をより正確につかむこと。社会性とは社会的テーマを持ちこむことではなく社会的高揚の一つの場を作ること。——無感動なそれについて決して自然そのものでない意識の場が新しく心の支えとして存在すること。人間が活動的であること、社会的であること、人間性を求めてゆくこと、——これが必要なことである。

しかし現在多くの絵がそれらの模写になりさがりつつあるように思われる。絵画は模写であってはならない。模写は実体とはなり得ないのであるから。(後略)

洋画特集 展示室5  
本特集では、作品の歴史や関連情報に焦点をあてて、作品の背景や制作の経緯、作家の経歴、作品の制作過程、展示の経緯、鑑賞のポイントなどを詳しく紹介しています。  
愛知県美術館 展示室五  
十月八日〜十一月廿一日

6室小展  
クリムトと光の諸相  
版画家・野村博と  
愛知県美術館 展示室七  
十月八日〜十一月廿一日

木村定三コレクション  
浜田葆光と熊谷守一  
愛知県美術館 展示室七  
十月八日〜十一月廿一日

Part.2 辻直之《影の子供》  
愛知県美術館 展示室七  
十月八日〜十一月廿一日

新発売  
二色展開  
狗子図柄筆箱  
愛知県美術館 展示室七  
十月八日〜十一月廿一日

人生は戦いなり  
各商品々々 於十階店  
愛知県美術館 展示室七  
十月八日〜十一月廿一日

紙ボールペン  
愛知県美術館 展示室七  
十月八日〜十一月廿一日

広告募集中  
愛知県美術館 展示室七  
十月八日〜十一月廿一日